

サンシャイン・ボーイズ



言わせて! 今日の芝居 五十字劇評 No.52

【五〇代】

▼全体を通して、お二人の掛け合いがさすが素晴らしかったが、コント内の看護師のシーンは完全にアウトだった。一切笑えず、非常に不快な思いをした。女性蔑視以外の何ものでもない。

コント内のシーンなので批判的立場から描くことも可能ではないのか、そうでなければ台本から削除していただきたいと思った。これが許容されるのであればセクハラはなくならないし、ジェンダー平等など実現しない。
(女性)

【六〇代】

▼円熟！引退した老コメディアン境地に達した二人の演技力にうなった。笑いながらもなぜか涙が滲んでいた。
(男性)

▼ヴォードヴィルの魅力は、令和に通じるか。主演二人の力量に拍手。片や脇を固める者との差に落胆。ザンネン。
(女性)

▼二人のかけあいに、とても期待して観劇、自粛生活

で感性がにぶったのか、後半やっと入れました。最後の挨拶(カトケンさん)(真摯)に感動、次回は何を観せてくれるのか、楽しみ!
(女性)

▼周りと一緒に大笑い。感性がズレていないことに、安心しました。
(男性)

▼加藤健一と佐藤B作のコンビは、予想通りの面白さだった。二人の絶妙なやり取りや問合いは流石だと思う。加藤さんが二〇一七年五月例会『Be My Baby』の時に、事務所で開催した講演会の中で、まるで即興で演じているように見える「ライブ感」の話をしていたが、今回もまさに「ライブ感」が炸裂していたと思う。互いに相手の凄さを認めながら、決して仲良くな

れない二人の辛口のコメディイ。ただ笑うだけではなく、人生の哀感を感じさせるこのような芝居はいいなあと思う。
(男性)

【七〇代】

▼台詞や動作の可笑しさに沢山笑った。観客皆顔下半分覆面で。思えば名優の舞台に対し失礼極まりない気がした。
(女性)





▼この演目は三二年前にも例会で、観劇した会員は今でも結構いるのではないだろうか。しかし、私は役者以外あまり印象に残っていない。今回は主人公たちとの年齢差もほとんどなくなり、歳を重ねることの苦さと哀感、後悔と懐かしさ、それらがなまぜになった感情を彼らと共有できたよ

うな気がする。また、加藤さんと佐藤さんの演劇人生も、ウィリーとアルのそれに重なっているように思えて、歳を重ねてにじみ出る演技もあるんだと感じた。最後に、二人はまた、米国版『やすらぎの郷』でいがみ合えるんだと思うと私はホツとしたが、当人たちはどうなんだろうか。(男性)

▼B作さんがどんな演技をするか楽しみでした。でもちよつと疲れてる感じ。バラエティショーの舞台が狭すぎ、コチャコチャやっているようで笑いが出てこない。

▼甥のマネージャーが話しかけているのにウィリーは違う話をするので、難聴か初期の痴呆症ではと思って観ていて納得、老人特有の

自己中心になって自分に都合の良いことには反応を示すのだとわかりその後、何かストーリーがさきさきとわかり久々に笑った。加藤健一と佐藤B作の始めはぎこちなさそうにでも息がぴったりと合っていた。もう一度観てみたい。(女性)

▼演劇を観る、創ると言うことは文化運動であることを改めて加藤健一さんのカーテンコールの言葉で感じた。その姿勢がステージにも表現されている。(女性)

▼上演後、流れてきた音楽は「明日に向かって撃て」で使用されたもの。B作さんの演技が光った芝居でした。

▼外国人の名前をフルネームで言うのは難しいし、それに○○劇場が加わるとなお難しい。間違えたら芝居が台なしになるところを噛みもせずにはべっている加藤さんとB作さんを感じしながら観ていました。演技はもちろん台詞の間でも笑わせてくれるなんて流石です。これからも良質の Comedy を期待しています。

編集スタッフから

良い芝居を観ていくためには、芝居の内容をできるだけ深く話し合っていくことが必要だと思えます。そのためきっかけ作りとして、劇評集を続けていく意味があると思えます。甘□・辛□あなたの感じたままの感想をぜひ投稿してください。